学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１６年７月２日
文責：ＪＵＮ

机のコの字型配置から生まれるもの

１　約５０年前、わたしの教室はコの字型だった

わたしが教師になったのは１９６７年です。赴任したのは、尾鷲市の小さな漁村にある児童数60名ほどの暫定僻地の学校。そこで１１名の子どもとの生活が始まりました。

わたしは、その学校に５年間在籍し、教師になって６年目に四日市市に転勤したのですが、その初任の学校のころからわたしの教室の机の配置は「コの字型」でした。今もって、「前向き型」の机の配置が多くの教室でなされていることを考えると、５０年も前に「コの字型」にしていたというのは驚きをもって受け取られるかもしれませんが、わたしにとっては少しも特別なものではありませんでした。そうすることが当たり前だったのです。

一つには、１１名という少人数、まだ若いわたしは子どもたちを指導するというより、子どもたちと一つになって生活するという感じになっていたので、自然と、向かい合うように机を並べたのかもしれません。けれども、今、振り返ると、それだけではなかったように思います。そのころわたしは、強い憧れを抱く教育の事実に出あっていて、その学校で行われている授業が「コの字型」だったから自分もそうしたのだと思うのです。

その教育の事実とは斎藤喜博先生によって島小学校、境小学校で生み出されたものです。当時、島小教育として全国的に注目を浴びていたのですが、その存在を知ったのは教師になって２年目、斎藤先生が最後の一年を境小学校で過ごしておられた年です。ということは、わたしには島小学校はおろか境小学校の事実も目にする機会はなかったのです。しかし、当時、斎藤先生は全国のいくつかの学校に入り、その学校が公開研究会を開くようになっていたので、わたしは、それらの学校で斎藤先生の教育に触れることができました。その最初が神戸市立御影小学校であり、この御影小との出あいがわたしの目指すものを決定づけたのです。そこで目にした子どものすがた、授業をする教師のすがた、子どもが考えを出し合い聴き合いながら学ぶ空気感、そのすべてがわたしをとりこにしたからです。若いわたしは、その憧れに突っ走りました。今思うとつたない真似事だったと思いますが、当時のわたしは、自分もそういう教育をしているという喜びにあふれていました。その授業における机の配置が「コの字型」だったのだと思うのです。

島小学校の教育は、新藤兼人の監修で「芽を吹く子ども」というドキュメンタリー映画になっています。制作されたのは１９６２年。撮影スタッフが一年間学校に入り撮影したもので、そこに編み上げられている島小学校の一年はため息の出るほど美しいものです。わたしがこの映画を観ることができるのは何年か後のことなのですが、その映画の中の子どもたちの表情、動き、子どもと子

どもの響き合いはわたしを魅了しました。その島小の教室が「コの字型」になっていたのです。ただし、島小がこの机の配置をことさら重要視していたとは思えません。むしろ普通のことと考えていたのではないでしょうか。ですから、わたしも特殊なことをするという意識はありませんでした。わたしの憧れる世界はそういうものであり、自分もそうするものだと思っていたのです。

５０年後の今、佐藤学先生の「学びの共同体」にかかわるようになり、「コの字型配置」に注目が集まるようになったのですが、わたしにとってあたり前だったことが、一斉指導型文化に浸ってきた教師にとって今もって特別なことなのだったのだと知り感慨深い思いになりました。わたしはなんと幸せだったのだろうと思います。

２　机をコの字に並べる意味とは

つい先日、伊勢志摩サミットが行われました。テレビでは、各国の首脳が、どのように到着し、どこに行き、どのように会議を行ったかを詳細に報道していました。もちろんサミットにおけるもっとも重要なことは協議・議論ですから、協議そのものがナマで中継されることはなかったですが、どういう会議室で行われたかは映し出されていました。当然のことですが、各国首脳は大きな円卓でお互いの顔が見えるように座っていました。わたしたちは教室における座席配置をコの字にしようとしているのですが、サミットの配置はロの字と言ったほうがよいかもしれません。

私が「当然のことですが」と断ったのは、こういう配置にして協議するのはサミットに限ったことではないからです。外国で行われるものでも日本で行われるものでも、人は、協議・議論するとき必ず互いの顔を見合うことのできる座席配置にします。教室では子どもたちを前向きに座らせて授業をしている教師たちでさえ、職員会議では何の違和感も持たないままロの字型、コの字型にしているのではないでしょうか。つまり、協議において前向き型配置を行うことはないのです。それはなぜでしょうか。

そのわけを考えるには、たくさんの人を前向きに座らせて行う講演会とサミットや職員会議のような協議の場とを比べればはっきりするでしょう。そこで発せられることばが、講演会の場合は講師から聴衆への一方向であるのに対して、協議の場では双方向です。つまり「対話」するときは、前向き型ではなくロの字型、コの字型にするということです。

対話するとき、語る人は他の協議者に向かって、自分の考えを届けようと意識し、自分の考えへの反応を期待して話します。そのとき、言葉を届けたい人の顔が見えることはとても重要なことです。どのような表情で聴いているか、それは共感なのか、違和感なのか、新しい気づきをしているのか、そういった相手の状況を見定めながら話すことができるからです。そうすれば、状況によっては話すことを変更したり言葉や事例を付け加えたりといった対応を臨機応変にとることができます。

「ロの字」「コの字」にする良さはそれだけではありません。対話の重複・交差が可能だというところに最大の良さがあります。ある人の考えを聴くと、さまざまな受け止め方がされるはずです。Ａという人は共感的に受け取るかもしれません。それに対してＢという人は懐疑的に受け止めるかもしれません。そうしたら、この後、きっとそれぞれの考えが発言されるでしょう。すると、その異なる発言を聴いた他の人はさらに思考し、また新たな考えを提起するかもしれません。つまり、

そこでは対話は「１対１」ではなく、特定の一人を中心とする「１対大勢」でもなく、対話の糸が複雑に交差し重複しつながり合う「蜘蛛の巣状」になるのではないでしょうか。そういう対話が「前向き配置」で深まるはずがありません。だから、古今東西、そういう対話をするときは、何の違和感もなく、だれもが「ロの字」「コの字」にしているのです。

３　授業が「コの字型」にならないのは？

では、なぜ、授業においては、「コの字型」にしないで「前向き型」にしようとするのでしょうか。そこには、授業とはどういうものかという考え方が横たわっているのです。

はっきり言えるのは、あまり「コの字型」にしようとしない教師は、授業において発せられる子どもの言葉を「蜘蛛の巣状」にしようと考えていないということです。子どもの考えが、いくつも交差し、いろいろなかかわりとつながりによって深まっていく、そういうものにしようとは考えていないということです。つまり、それはその人の授業観によるのです。

教師が問い、その問いに答えさせ、教師が教えたいことを効率よく指導するという授業観だったら、何も「コの字」にする必要はありません。むしろ、教師に向かって前向きに座らせておいたほうが、教師から子どもの様子がよく見えて好都合なのです。

ある学校でこんなことがあったそうです。

「学び合う学び」への取り組みを始めたころ、とにかくやってみようということで、一律に、どの学級でもコの字に机を配置することにしたのです。そうして何か月かたったころ、何人かの教師から「どうしてこういう並び方にするのかわからない」という疑問が出てきたというのです。その声を受けて、ようやくその学校でも、「コの字型」にするのはどうしてなのかと考えてみたというのです。遅きに失したと言えるかもしれませんが、そういう疑問を取り上げ全教師で考えてみたのはとてもよいことだと言えます。

その後のことはわたしにはわからないのですが、たぶん、その議論は、単なる机配置の在り方にとどまらず、授業観、学び観に及んでいったのではないでしょうか。机をどう並べるかは、形だけのものではなく、どう授業するかに基づくものであり、もっと言えば、子どもの学びとはどういうものなのかに行き着くものだからです。

５０年以上も前に行われていた斎藤喜博先生の島小において、あたり前のように「コの字型」配置で学んでいたということは、島小における学びが、わたしなりの言葉で言えば、子どもたちがそれぞれの考えを出し合い、聴き合い、つなげ合い、支え合い、学び合うものだったからにちがいありません。そこでは、子どもたちの言葉が「蜘蛛の巣状」にかかわり合っていたのです。だから、「前向き配置」になるはずがなかったのです。そう考えると、それだけでも、あの時代に島小教育が行われたすごさを実感します。そして、わたしは、そのすごさの洗礼を受けたのです。当時の日本中の学校がどういうものだったか、僻地の小さな学校に勤める無知な若者教師には、そこまで斟酌する余地はありませんでした。わたしは憧れたのです。こうしてわたしはそうすることが当然だとしゃにむに実践することとなりました。

教師にとって、若いころにどういう教育に出あうかは決定的に大切です。いえ、年齢に関係ないですね。いくつになっても、出あいと憧れからすべてが始まります。わたしの「学び合う学び」は、

教師としてスタートした時から始まっていたと思うと、幸せなことだったと思います。

４　子どもの学びに向き合う先生方へ

この「学びのたより」は、今、子どもたちの前に立つ多くの先生方に読んでいただいています。その先生方の中には、子どもたちの机を「コの字型」にしていない人がいるかもしれません。「コの字型」にしてはいても、どうしてこの配置がよいのだろうと思う人もいるかもしれません。

佐藤学先生は、『学校を改革する』（岩波書店）のなかで、「コの字型」について次のように述べておられます。

――― クラス全体を対象とする授業は、コの字型（ゼミナール形式）の配置で行う。その理由は、コの字型の教室の配置が、一人残らず生徒を協同的学びに参加させる基礎条件だからである。

佐藤先生は、「コの字型」が「協同的学びへの参加の基礎条件」だとおっしゃっています。つまり、教師から教えてもらう学習ではなく、子どもと子どもが分からなさや気づきに寄り添い合い、考えと考えをつなぎ探究する学びに、すべての子どもを参加させたいと思ったら、互いの顔が見え、だれがどんな様子になっているかを知ることのできる「コの字型」にしなければならないということなのです。その協同的学びを実現するのが、互いの考えを出し合い聴き合うという「対話」です。どの子どもも、仲間の考えの一つひとつに耳をそばだて、表情豊かに反応しあうとき、ともに学ぶ充実感が子どもの内に生まれます。ましてやその対話の中から思いもかけない発見をしたとき、子どもの顔は知的な喜びと感動に包まれます。「コの字型」配置は、そういう表情をみんなで共有することを可能にするのです。「前向き配置」では、その喜びと感動の輪に心から入れないのです。向かい合うという位置関係の持つ意味には大きいものがあります。

「前向き配置」がすべてよくないというわけではありません。授業内容によっては、前向きに並べたほうがよい場合もあります。５０年も前から「コの字型」にしていたわたしも、全員を前向きにすることもありました。けれども、子どもによる対話と探究と発見のある学びを生み出すには「前向き配置」ではだめなのです。どうしても「前向き配置」をやめられない人は、その理由を自分で考えてみるとよいかもしれません。そうすれば、たとえば、子どもの対話による学びを本気で実現しようとしていない自分に気づくかもしれません。自分が教えたいことをきちんとわからせなければと思っている自分に気づくかもしれません。子どもが対話して学び合うだけで学びが深まるはずがないと考えている自分に気づくかもしれません。

けれども、わたしがかかわる学校においては、どの先生も「学び合う」ことは大切なことだと思っておられます。「協同的に学び合う」ことで、学びが深まったらどんなによいだろうと思っているのです。そこから一歩踏み出せないでいるだけなのです。一人の人間として多くの他者と接するとき、そのかかわりが深くなればなるほど、人と人とは向かい合うものだという経験があるにちがいないからです。

他者と向かい合い、他者から学び、他者に寄り添い、他者と対話し、ともに生きていける共生の世の中に旅立つ子どもたちの原体験として、つながり合う授業はなくてはならないものです。わたしたち教師は、そういう子どもたちの未来のためにも、「コの字型」という小さなことにも心を配っていかなければならないのです。